JETの広場
The Japan Exchange and Teaching Programme

来日直後オリエンテーション

七・八月期

(財)自治体国際化協会業務部

海外で夏休みを過ごす家族連れや若者たちが、スーツケースを携えて成田空港の出発ロビーを埋め尽くすころ、当協会業務部職員は世界各国から集まる新規JET参加者を出迎えるべく、成田空港の到着ロビーへ集結する。新たに来日するJET参加者の出迎えとオリエンテーションに向けて、一年で最も忙しい季節の到来である。今号ではJETプログラムの中でも最大の行事といえる来日直後オリエンテーションについてお知らせする。

JETプログラムは今年で一七年目を迎え、平成一五年度は、新規招致国のギリシャ、セントルシア、ルクセンブルクを含む四〇カ国から約六二〇〇人を超す青年が参加しており、このうち、約半数が一年目の新規参加者である。例年、そのほとんどが欧米の大学卒業シーズンに当たる七、八月期に来日する。

当協会は、彼ら新規来日者に対して、日本での生活・勤務を円滑にするための知識や情報を提供するとともに、地域の国際化の推進という本事業の趣旨の理解を深めるため、来日直後オリエンテーションを総務省、外務省、文部科学省と協力して実施している。

今年度は三〇九九人が来日し、七月二七日来日のA日程、八月三日来日のB日程及び八月二〇日来日の二次来日の三回に分かれて来日した。

A日程　七月二七日(日)
B日程　八月三日(日)

●JET参加者来日

世界各国からのJET参加者は、母国から直接、あるいはいくつかの便を乗り継いで全員が成田空港に降り立つ。胸元に「JET」と刻まれた真っ赤なJETTシャツを身にまとい、当協会職員と現役JET参加者から選ばれた六五名のTOA(東京オリエンテーション運営協力者)が夜も明けぬうちから新規参加者を出迎える準備に取りかかり、成田空港第一、第二ターミナルに分かれて待ち受けた。一人でも目を引くような真っ赤なJETTシャツを大勢のスタッフが着用している光景は圧巻であり、一般の乗客も気にならずにはいられないらしく、何をしている団体なのか尋ねられたり、中にはTシャツをどこで売っているのかと聞かれるほどの目立ちようであった。

⬆次々と到着する新規JET参加者

七月二七日午前六時四〇分成田着の便でメルボルンから一二二名が到着したのを皮切りに、世界各地から新規JET参加者が続々と空港に降り立った。参加者は日本独

特の蒸し暑さと到着ロビーの混雑に戸惑いながらも、新生活への期待に満ちた表情を浮かべていた。

ＪＥＴ参加者を乗せたフライトの到着は夜の八時過ぎまで続く。必ずしも予定通り到着するとは限らず、予期せず到着便が重なることもある。時間帯によっては、ゲートから出てくる参加者で通路は溢れんばかりに埋めつくされ、到着チェックと荷物搬送手続のために長蛇の列を作ることもある。この間、スタッフは笑顔で彼らを出迎え、研修会場行きのバスまで誘導し、ＴＯＡの先導で続々とバスへ乗り込み、研修会場へ移動する。ようやくバスの席に腰を下ろした参加者たちは、長時間のフライトと多くの荷物を携えての到着手続き、そして期待と不安が入り交じる緊張感から、疲れを隠せない様子であった。

Ａ日程　七月二八日(月)
Ｂ日程　八月四日(月)

●開会式

日本で迎える最初の夜が明けると、いよいよ三日間にわたる来日直後オリエンテーションの開始である。

初日の開会式では、初めに当協会二橋理事長による新規ＪＥＴ参加者たちへの歓迎の挨拶が行われた。

二橋理事長は、参加者たちの勇気と情熱に敬意を表し、彼らが日本の地域社会でたくさんの日本の人々と向き合い、日本の良き友人となること、そしてＪＥＴプログラムの活動や経験が彼らの将来のステップとして、かつ日本と各ＪＥＴ参加者の母国との友好関係のさらなる発展へも寄与することを願っていると語った。

歓迎の挨拶に続き、ＪＥＴプログラムを推進する立場から、来賓として出席していただいている三省(総務省、外務省、文部科学省)を代表して、Ａ日程では外務省の糠沢文化交流部長が、Ｂ日程では文部科学省の樋口官房審議官が挨拶を行った。

●ＡＬＴ全体会・ＣＩＲ全体会

開会式後、職種別に分かれての研修が行われた。

外国語指導助手(ＡＬＴ)の全体会では、日本の外国語教育の現状や今後の展望、授業を進める上での留意点などについての説明がされた後、ＡＬＴの一日を描いたビデオが上映された。

新しい職務への興味と不安から皆真剣な面もちでビデオに見入っていたが、笑いやどよめきが巻き起こる場面も多々見受けられ、思わぬところで文化の違いを感じさせられた。

国際交流員(ＣＩＲ)の全体会では、日程説明等に引き続き、今後直面するであろう「カルチャーギャップ」をゲームを通じて体験し、その対処方法について学習した。今後の職務に関する基礎知識として習得しようと熱心に楽しく学んでいる姿がうかがわれた。

●歓迎夕食会

夕方からは歓迎夕食会が開催され、二橋理事長による歓迎の挨拶と乾杯の発声に続き、和やかな歓談の時間となった。

ＪＥＴプログラム関係者や当協会役員とＪＥＴ参加者たちが談笑する様子や、出会いを記念して写真を撮影する参加者たちの姿が会場のあちこちで見受けられた。長旅とオリエンテーションの疲れから最初はおとなしかった参加者も、時間がたつにつれて活発に交流を深めるようになっていった。

Ａ日程　七月二十九日(火)
Ｂ日程　八月五日(火)

●ＡＬＴ分科会・ＣＩＲ分科会

オリエンテーションの二日目の午前中は、職種別の分科会が開催された。

ＡＬＴの分科会では、先輩ＡＬＴを講師に迎え、まず、「Team-Teaching Demonstration and Effective Lesson Planning」と題して日本人教師とのティームティーチングの進め方の説明がされた。続いて「Creative Use Teaching Materials and Designing Language Activities」と題して、生徒を授業に引き込む方法についての説明が行われ、さまざまな参加型ゲームの紹介、ビデオやコンピューターを使った授業の進め方など、経験に基づいた具体的で実践的な説明が繰り広げられた。

ＡＬＴの分科会では、昨年に引き続き、補助者として中高生が起用された。近くＪ

ET参加者が身近に接することになるであろう日本の中高生たちは参加者たちの注目の的となり、最初はぎこちなかった参加者と中高生の会話も、一緒に昼食をとるところにはすっかり打ち解けた様子となり、研修の合間のわずかな休憩時間には中高生たちの設けたブースは黒山の人だかりとなった。

CIRの分科会では、最初に、配置先団体の種別(都道府県、市町村、国際交流協会など)ごとに分かれて、それぞれ一年間の行事と仕事の流れについて説明が行われ、続いて「CIRの職務」と題して、日本語でのスピーチと挨拶、翻訳・通訳業務への取組み方や、職場や地域におけるコミュニケーションの取り方などについての実践的な説明がされた。

●CLAIR分科会

午後からは、参加者全員が対象の当協会主催の分科会が開催された。

クレアからの重要事項のお知らせ、最初の一ヵ月の過ごし方、日本語の自主学習、日本の自動車の運転等、さまざまなテーマの分科会が用意され、各自が興味のある分科会を自由に選択して出席できるものである。これから生活していく上での貴重な情報であり、配付された資料を手に興味深く聞き入っていた。

また、これらの分科会と並行して、取りまとめ団体(都道府県・政令指定都市)別のミーティングが開かれ、翌日以降の予定などについての説明が行われた。参加者たちにとっては、配置先担当者との初めての対面であり、緊張しつつも、担当者の顔をじっと見つめ熱心に耳を傾けていた。

●AJET

今回のオリエンテーションでは、正規プログラム以外に、AJET(JETプログラム参加者の会)が分科会やインフォメーションフェアを開催した。

分科会では、「Kulcha in the Klassroom」や「Getting the Most for Your Yen」「Navigating the Wilds of Japanese Cooking」「Volunteering in Japan」「Telecommunications in Japan」などのテーマで、先輩JETであるAJET役員たちが、自らの経験を基に仕事や日本での生活に役立つと思われる生の情報、あるいは今後の日本での生活のベースの一つとなるであろう各種グループ活動の様子等を説明した。AJETの分科会については任意参加であるにもかかわらず、中にはいすに座ることができず立ち見の出席者が出るほどのにぎわいを見せる分科会もあった。

⬆AJET分科会で講師を務める先輩JET

すべての分科会が終了すると、英国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド等大使館主催のウエルカムパーティが開催され、各国の参加者は会場を移り、大使をはじめとする母国の外務職員と談笑しながら親睦を図っていた。

A日程　七月三十日(水)
B日程　八月六日(水)

●新たな生活への出発

いよいよ、スタート前のオリエンテーションが終了し、本当の日本での生活の幕が開かれる。集団での研修を終え、全国津々浦々へ及ぶ配置先へ向け、各都道府県、政令指定都市ごとに、さまざまな交通手段で各地へと旅立つ。

当協会職員らに見送られ、正午までにはすべてのJET参加者が、無事に赴任地に向けて、研修会場を後にした。

彼らが今後、このオリエンテーションで得た知識や情報を活かし、日本という見知らぬ土地での生活を力強く歩み出し、わが国とJET参加者たちの母国との相互理解を深める架け橋として活躍し、草の根の国際交流の推進に大いに貢献してくれることを期待したい。

JETの広場
The Japan Exchange and Teaching Programme

恩返し

(財)福島県国際交流協会国際交流員
Scott Aalgaard　スコット・アルガード

「どれくらい日本にいるのですか?」国際交流員として、よく聞かれることである。「日本と母国のカナダの間を行き来して一七年になります」と答えると、ほとんどの場合、相手にびっくりされる。そして、北海道の大根畑で仕事をしていたとか、両国のちゃんこ鍋屋で力士を相手にウェイターもやっていたなどと、一七年間の間に体験できたさまざまな経験をさらに説明すると、相手の表情がなおさら複雑になる。次に出てくる質問はほとんどの場合、「なぜ?」である。カナダ人青年である僕が、生まれつき自分の社会でない日本に、なぜこれだけの時間やエネルギーをかけるのだろう?という意味だ。その答えは妙に簡単だ。日本を愛するからである。長年の数多くの経験の末、日本が第二の故郷だと心から思っているのだ。

「日本」が僕の人生を変え、そして今存在する「自分」に強く影響を与えたのだ。僕が国際交流員になったのは、そんな「日本」に何らかの恩返しがしたかったからである。

僕は福島県福島市にある(財)福島県国際交流協会に勤めている。東北の最南部にある福島県は、広大で美しい自然環境を自慢にしている。ここには感動的な景色、素晴らしいスキー場、ゆったりできる温泉、そしておいしい果物があり、三年近く前に福島へ来たときから何度も僕はこういったものすべてに触れている。これだけ豊富で美しい県に来ることができた自分のことをすごく幸運だと思っている。

しかし、スキーや桃が福島県のすべてではない。福島県の社会の表面の「皮」を少しだけでもめくって中をのぞいてみれば、変化の真最中の社会が見えてくる。福島県が直面している数多くの変化の一つとして、非常に急ピッチで深まっている社会的な多様化(国際化)がある。昨年末の時点で、福島県には一万二五一〇人の外国籍県民が暮らしていた。四〇八三人しかいなかった平成元年と比べれば、大幅な、そして大変急な増加が明らかになる。いわゆる「国際結婚」も同様に増加しており、既に県内の結婚数の五%以上に達している。また、外国籍の親に生まれる子どもたちの数も増えており、県内の出産数の国際化も進化している。結論から言うと、社会的な多様化が実際に定着し始めているのだ。そしてもちろん、これは福島県だけの現象ではない。一八〇万人近くの外国籍住民が暮らす今日の日本社会全体が実際に国際的になってきているのである。国際交流員としての僕の目的は、この社会的な多様化をできるだけうまく促進し、日本で深まりつつある多様性を排除や差別につなげるのではなく、豊かさへとつなげていくことである。来たるべき国際化時代の中で、日本に住むすべての人々のために安全で豊かな将来を確保するには、これが大きなキーだと思う。

(財)福島県国際交流協会の使命の一つとして、「多文化共生の福島の創造をめざす」と

いう理念がある。二〇〇一年に当協会に着任して以来、僕はその理念の実現に向けて全力を注いできた。着任一年目には多文化共生を紹介する「出前講座」を企画し、中学校、高校、公民館、大学等県内数十カ所で合わせて三一〇〇人以上の県民を対象に講座を実施した。この出前講座を通じて、当協会の理念を推進することができただけではなく、県民のために働いている地方公務員として、多くの県民と触れ合うこともできた。この企画でどこに行っても、参加者の方々の温かさや理解力が大変感動的であった。会話を交わすことができた多くの県民の方々のことは、永遠に僕の記憶に残るだろう。

今年は「多文化共生地域づくりリーダー育成事業」という、地域社会における多文化共生の推進を狙いとする新しい企画を立案し、担当している。この事業の第一歩として全県から一八名の参加者を募集し、一つのワーキンググループを結成した。現在は研修会や公開講座を通じて、福島県における国際化という現象や多文化共生の理念、そして地域リーダーシップ、エンパワーメント、メディアリテラシー等といったテーマをもとにこのワーキンググループを「育成」している。八カ月の育成プログラムを終えた後、このワーキンググループがNPOまたはNGOに再結成され、福島県の地域社会のいわゆる「草の根レベル」から多文化共生を積極的に推進してもらうようになることが、この企画の最終的なゴールである。できるだけ最新の、そして最も進歩的な情報を本グループに提供するために、大阪やカナダから専門家や外部講師をお招きすることも企画している。このような企画は東北地方では初めてであり、ワーキンググループの参加者の皆さんの熱意を大変誇りに思っている。

地域社会で活躍する国際交流員には、その地域に仕えるため最善を尽くす重い責任があると思う。「交流事業」はもちろん価値あるものであり、やっていて楽しい仕事ではあるが、今日の日本の地域社会の国際化においては、単なる「交流事業」がすべてではないことを常に考える必要がある。この時代だからこそ、国際化に取り組む際には、目を外国の文化や言葉ばかりに向けずに、国内の視点から、いわゆる「内なる」角度から国際化を考え、地域社会における多様化の促進の重要性も十分に理解することも必要だ。国際交流員として、国際化し多様化する地域社会の特徴やニーズをよく把握し、ニーズに基づき有意義に仕事を進めることがとても大切なことなのである。

国際交流員の仕事は、地域に変革をもたらすことができる仕事だ。自分の仕事が自分の仕える地域社会に良い影響を与えていると思うと、大きな幸せが胸に宿る。僕はこの幸せを味わえたことを大変幸運に思っている。そして、言葉にできないほどお世話になってきた日本社会にも少しだけでも恩返しできた自分のことも、本当に幸せ者だと思っている。

カナダ・ブリティッシュコロンビア州キャンベルリバー出身。ヴィクトリア大学でアジア太平洋学の学位取得。JETプログラムに参加した理由は、キャンベルリバーの姉妹都市である北海道石狩市で過ごした10日間のホームステイプログラムで日本と恋に落ちてしまい、それ以来日本にまた戻ってくるチャンスを探していたから！JET卒業後は、大学で日本学についての教育、講義を続けたいと思っている。特に国際化、人権、権力や日本の大衆文化について興味がある。趣味は音楽（特に長渕剛）。

Scott Aalgaard

ただ髪を切りたかっただけなのに

JETの広場
The Japan Exchange and Teaching Programme

山梨県上九一色村教育委員会外国語指導助手
Eboni Monique Staton　エボニー・モニーク・ステイトン

アメリカに住んでいるときは当たり前だと思っていたことがどんなに多かったか考えたこともなかった。日本では、七面鳥サンドウィッチやFoot Fruit Snacksの果物、サイズに合う婦人靴などが手に入らないことは分かっていた。けれど、自分に適したヘアケアやスキンケアの製品を探すのが、こんなに大変なことだとは思ってもみなかった。日本中に米軍基地があるのだから、自分に必要な物を手に入れるのに一時間以上は離れていないだろうと思っていた。問題は、そういった物を手に入れるためには、基地まで連れて行ってくれる友達を作ったり、最寄りの施設がどこにあるかを探し出さなければならないという過程のことを、考えていなかったところにあった。

日本に来る前は、私はストレートパーマをかけていたが、出発の二日前に伸ばした部分をすべて切り、短くカールしたアフロヘアにした。その方が扱いやすいだろうと思ったのだが、想像を絶する悪夢のような結果になってしまった！ヘアケア製品を見つけることができず、基地には知り合いもなく、最寄りの基地の場所も分からず、自分と同じ製品を使ったことのある人も知らなかった。一〇月ころには、私の髪はもはやスタイリッシュとは呼べない長さに達し、カットする必要があった。アフリカ系アメリカ人女性である友達のエリカも、同じ問題を抱えていた。これ以上、自然の状態のままの髪を自分で扱うのは無理と判断し、私はストレートにすることにした。いくつものホームページを調べた結果、ようやく東京にあるお店を見つけた。私はそこの美容師に髪をどうしたいのかを説明し、彼女は引き受けてくれることになった。結局うまくいったのだが、このことは日本で経験した中で、最も困難で時間のかかった苦い経験の一つとなったのだった。

エリカと私は、既に日本にいて化粧品の入手方法や美容師の探し方を知っている人がいたらどんなに楽だっただろうと話し合った。むなしさを埋めるために何かをしなければ、と二人が決めたのは、日本に来て九カ月がたってからのことだった。考えを行動に移すときが来たのだ。国中に点在しているアフリカ系の人たちと連絡を取るのはどのくらい大変だろうかと悩んだが、六月に行われる二年目に契約を更新するJETの再契約予定者研修会が、グループのメンバーと話し、リストを作るための名前や連絡先を集めるのに、絶好の機会だと気付いた。私たちはこのグループを、Japan Exchange Teachers of African Descentの略であるJETs ADと呼ぶことにした。

私たちは、その研修会で契約を継続した一五～二〇人のアフリカ系の人々と会い、Eメールグループを作ることが、続けていく上で最良の手段だと判断した。自分たちの地域や地方にいるメンバーや、離れた場所にいるメンバーを見つけ出すことができ

るようになるからだ。思い描いていたことが、ついに現実になろうとしていた。七～八月の間にさまざまな同窓会や口コミなどにより、三〇人がグループに加わった。エリカと私は、新たにJETs ADに加わった関東地方の数名のメンバーとともに、新JETの人々に情報を広めるため、新規JET参加者の来日オリエンテーション期間中に東京へ行った。そこでは、アフリカ系の新JETと出会ったほか、このグループを設立したことや、最初に日本に来たときにこういったものがあればよかった、と言って賞賛してくれた二年目、三年目のJETの人たちにも出会うことができた。

現在、メンバーは一〇〇人を超えており、今なお増え続けている。四七都道府県のうちの約四二都道府県に少なくとも五カ国からやってきた人々が点在している。グループのメンバーは、それぞれの地域にいるアフリカ系の人々と連絡を取り合い、さまざまなことについて話し合っている。このようなつながりを、自分と同じ生活習慣や文化を共にする人たちとの間につくることで、日本に対する理解を一層深めることができた。日本の文化や伝統をアメリカの文化とだけ比べることは、私自身が日本を理解する上での限界をつくってしまう。(故郷での暮らしと比べて、日本での暮らしにさまざまな異なった観点を持つ)メンバーとの話し合いを通して、もしこの文化内でのつながりがなかったら分からなかったようなことを理解することができた。離れ離れに暮らす多くのメンバーにとって、同じアフリカ系の人間であることはさまざまなことを意味する。同じ肌の色を共有しているため、周りの人々は私たちのことを単なるアフリカ系のグループとして見るかもしれないが、私にとっては、さまざまに異なった国々から来てお互いに多くを学ぶことのできる人同士として見える。

私が最も感慨を覚えるのは、個人的なきっかけで始まったことが、自分だけでなく多くの人々の生活の中でこんなにも役立つ重要なものに発展しているということだ。現在、JETs ADは、基金を募る取組みのため、さまざまな県で行われる国際的な公益プロジェクトを調整している。うまくいけばそういった取組みの結果、二〇〇四年春にアフリカ大陸を訪れ、募金を届けることができるかもしれない。そうした積極的な組織に貢献するとともに多くを得ることができ、本当に恵まれていると思う。私が日本を去った後もずっと、JETs ADグループが成長し続けることを期待している。点在している人々とつながり合い、人として持っている強さに気付くことは、自分自身に対する誇りと、それまでの想像をはるかに超える理解を与えてくれた。これらが今後も発展し続けますように。

アメリカ・コネチカット州ノーワーク生まれ、ノースカロライナ州ヴァンスボロー出身。ノースカロナイナ大学チャペルヒル校で、アフリカンアメリカン学とコミュニケーション学の学位を取得。将来は、黒人社会と国際社会の融合を切り拓く道を見つけたい。日本での生活は私の人生を明らかに変え視野を開かせてくれたので、黒人の子どもたちのために、自分と同じような人生を変えるような経験をもたらす道を拓きたいと思っている。趣味は、アコースティックギターの練習、日本語学習、サッカーなど。

Eboni Monique Staton

Scott Aalgaard

taking up my post in 2001. In my first year, I planned and put into practice a 'travelling lecture', through which I was able to introduce the concept of multiculturalism to over 3,100 people in dozens of schools, public halls and universities throughout the prefecture. This project allowed me both to work toward the realization of my Association's objectives and to get out and meet and interact with the people on whose behalf I, as a prefectural public servant, am working for. Wherever I travelled with this project, I was always deeply impressed with the warmth and intelligence of my audience. Many of those with whom I was able to chat will stay in my memory forever.

This year, I have devised and been put in charge of a new project aimed at actively promoting multiculturalism in Fukushima from the grassroots level. At the centre of this project is an 18-member 'working group' made up of applicants from across the prefecture. We are now 'training' this group in issues such as social 'internationalization' as it is found in Fukushima, theories of multiculturalism, social leadership, empowerment, media literacy and more, with the goal of having the working group go on to form a new non-governmental organization that will actively promote multiculturalism in Fukushima as it sees fit. This project involves bringing in specialists and guest lecturers from as far away as Osaka and even Canada in order to ensure that the working group receives the most progressive and up-to-date information. This project is the first of its kind in Tohoku, and I am extremely proud of our group and the passion with which they are working.

I truly believe that CIRs have a responsibility to serve the areas in which they live to the best of their abilities. Purely exchange-oriented activities are certainly worthwhile and enjoyable, but it must be remembered that these activities are not the be-all and end-all of 'internationalization' in Japan. In this day and age, it is vital to look at internationalization from a local, internal angle, and to be well aware of the fact that 'internationalization' in Japan today is as much about facilitating domestic social diversification as it is about offering insights into foreign countries and societies. It is vital to have a clear understanding of the specific characteristics of our increasingly international and diverse localities, and to devise goals based upon what is truly needed in those areas.

The CIR is in the position of being able to help bring about real and lasting social change. Surely there is no greater joy than the knowledge that one's work has had a positive impact on the society that one serves. I feel extremely lucky to have had the chance to know this joy, and to give something back to the society that has given me so much.

Eboni Monique Staton

was finally being realized. Between June and August, either by word of mouth, help from various alumni associations or personal contact, about 30 people had joined our group. Erica and I, along with a few other people in the Kanto area who had recently joined JETs AD, went to Tokyo during both Group A and B Post-Arrival Orientations to spread the word among the new JETs. Along with meeting the new JETs of African descent, we also met 2nd and 3rd year JETs who complimented us for creating the group and wished that something like this had been around when they first arrived in Japan.

Now, we have over 100 members and are still growing. There are people from at least 5 different countries spread out over 42 or so of Japan's 47 prefectures. The members of our group are making connections in their respective areas with other people of African descent and can talk with about much more than just where to find hair products. Making these connections within my own cultural group has led to a much greater appreciation of Japan. Comparing Japanese culture and traditions with only American culture certainly limits the depth in which I can appreciate Japan. Through discussions had with members (who have many diverse perspectives of life in Japan compared with life in their home country), I have an understanding of things I would not have, had this intra-cultural connection not been made. Being a person of African descent means different things to the many members of the diaspora. Because we share the same skin color, people around the world may look at us and see only a group of people of African descent. I look around and see people who come from many diverse countries and who have a lot to learn from one another.

What amazes me most is that something that had its origins in personal reasons has developed into something so beneficial and important to not only my life, but so many other people's lives. Currently, JETs AD is coordinating an international public service project that can be implemented in the different prefectures for fundraising efforts. Hopefully, these efforts will result into a trip to the African continent in the Spring of 2004. I am so blessed to have the opportunity to contribute to and benefit from such a positive organization. I hope that the JETs AD group continues to prosper long after I have left Japan. Connecting across the diaspora and realizing the diversity that we have as people has provided me with a self-pride and understanding far beyond what I had imagined. May the building continue.

GIVING BACK

As a Coordinator for International Relations, I am often asked how long I've been in Japan. The answer - that I've been coming and going between Japan and my home country of Canada now for almost seventeen years - never fails to raise eyebrows. When I explain some of the experiences I've had during those seventeen years - such as packing daikon radishes as a farmhand in Hokkaido, or serving chanko-nabe to wrestlers as a waiter at a sumo restaurant in Tokyo's Ryogoku district - the eyebrows all but shoot through the roof. The follow-up question, usually, is 'Why?' Why would a young Canadian devote so much time and energy to a society that, at least by birth, is not his own? The answer is deceptively simple: I love Japan. After so many years and so many experiences, I have truly come to consider Japan my second home. In a very real way, Japan changed my life and shaped the person that I am now. I became a CIR because I wanted to give something back.

I work at the Fukushima prefectural International Association, located in Fukushima City. Our prefecture, located in southern Tohoku, boasts a vast and beautiful natural environment. Fukushima is home to impressive scenery, great skiing and snowboarding, relaxing onsen and delicious fruit, all of which I have indulged in - repeatedly - during my nearly three years here. Indeed, I feel extremely fortunate to have been placed in such a beautiful area.

But there is much more going on here in Fukushima than just snowboarding and peaches. If one takes the time to peer just below the surface of our society, one will see a society in transition. Among the many changes the prefecture is facing is the fact that Fukushima's society is diversifying and 'internationalizing' at a very rapid rate. Last year, 12,510 non-Japanese residents called Fukushima home; a vast increase over 1989, when the number was just 4,083. 'International' marriages are also on the rise: more than 5% of the marriages that take place in Fukushima Prefecture can now be classified as such. The number of children born in Fukushima to non-Japanese parents is increasing, as well. In general, it can be said that social diversification is truly beginning to take root in Fukushima Prefecture. Of course, this phenomenon is certainly not limited to our region - with almost 1,800,000 non-Japanese residents, Japan as a whole is becoming increasingly 'international'. My goal as a CIR is to help facilitate this social diversification, and to ensure that increasing diversity in Japan is associated with enrichment rather than discrimination. This, I believe, is a major key to ensuring a safe and secure future for all of Japan's residents in the international age to come. One of the stated objectives of the Fukushima International Association is the promotion of multiculturalism here in Fukushima Prefecture, and it is toward the realization of this goal that I have dedicated all of my energies since

All I Wanted Was a Haircut

I never realized how many things I truly took for granted living in America. I knew by coming to Japan, I'd miss things like turkey sandwiches, Fruit by the Foot Fruit Snacks, and women's shoes that actually fit. But I didn't realize just how hard it would be to find suitable hair and skin care products. With an American military presence all over Japan I was sure I would be no more than an hour or so away from all the products that I would need. The problem was that I never considered all the work that would have to go into making friends who could take you on the military bases to get those products, as well as locating the facilities closest to me.

Before I came to Japan, my hair was relaxed (straight perm), but two days before my departure I cut all of the relaxed hair and wore a very short curly afro. I thought having my hair this way would be much easier to maintain but it turned out to be more of a nightmare than I'd ever imagined! I couldn't find any hair care products, I didn't know anyone on any military base, had no way of locating the nearest base, and didn't know anyone who used any of the products I do. Around October my hair had reached a length that was no longer stylish and needed to be cut. My friend Erica, another African American female, was dealing with the same issue. I decided that I couldn't deal with natural hair on my own anymore so I decided to go back to a relaxer (straight perm). After surfing a million websites, I finally found a place in Tokyo. I spoke with the beautician about what I wanted and she said she could help me. It turned out very well but was one of the most difficult and time consuming ordeals I'd gone through in Japan.

Erica and I talked about how much easier it would be if we were able to contact people who were already here and knew ways to procure cosmetics and find hair dressers. We'd been here in Japan for about 9 months before we decided that we had to do something to try to fill our void. The time had come to put that discussion into action. We considered how difficult it would be to connect with people of African Descent because we were spread out all over the country. However, we also realized the Conference for Re-contracting JETs for 2nd year JETs, coming up in June, would be the perfect time to start talking about the group and get names and contact information to begin our list. We would call our group, JETs AD, which stands for Japan Exchange Teachers of African Descent.

We met between 15 or 20 recontracting JETs of African descent at that meeting and decided the best way to keep it going was if we had an e-mail group. People would be able to locate other people in their area and region as well as people who lived further away. Our vision